

古代蝦夷（エミシ）の実像に迫る

熊谷公男

はじめに

古代、東北・北海道地域に住んでいた人びとは蝦夷（エミシ）とよばれた。彼らほど、当時の都人や後世の人びと、さらには江戸時代以降の研究者にさえも、実像からかけ離れた偏見に満ちた目でみられ、誤解されつづけた人びとといえなかつたのではなからうか。小稿では、そのような偏見に満ちた過去の蝦夷像がどのようなものであつたかをまず紹介し、その後で現在の考古学・文献史学などの研究水準から、古代蝦夷の実像はどのようなものと考えられるかを概観してみることにしたい。

一 古代の蝦夷（エミシ）観——王化に浴すべき蛮族——

まず最初に、古代の人びと、とくに記録を書き残したよ

うな都の支配層が蝦夷をどのような人びとと見ていたか、あるいはどのような人びとであると主張していたかを見ておこう。

まずもつとも有名なのは『日本書紀』景行天皇四十年七月条にみえる景行天皇のヤマトタケルに対する言葉であるう。

其の東夷の中に、蝦夷は是尤も強し。男女交り居、
父子別無し。冬は穴に宿ね、夏は櫛に住む。毛を
衣、血を飲み、昆弟相疑ふ。山に登ること飛禽の如く、
草を行くこと走獸の如し。恩を承けては忘れ、怨を
見ては必ず報ゆ。（原漢文、以下同じ）

ここで蝦夷は、(1)儒教倫理の根本である父子・男女の区別すらなく、(2)その日常生活は、穴蔵や樹上に住み、毛皮を着て、動物の生き血を飲んでおり、(3)その行動は、草原を

獸のように疾駆し、人に恩を受けてもすぐ忘れ、仇敵には必ず報いるなど、心性も身のこなしもおよそ一般の倭人（日本人）とは対極にある人びととして描かれている。景行天皇のことばとして語られたこのような蝦夷像は、その後、古代蝦夷のイメージを形作るのに絶大な影響力をもつたし、現在なお多くの人びとの蝦夷像の出発点になっているのではなからうか。

筆者は、これを『日本書紀』が書かれた奈良時代の都の支配層の典型的な蝦夷観を示すものとみることと異存はないが、傍線部が『文選』序とほとんど同文であることが端的に示しているように、これをそのまま当時の蝦夷の実像を伝えてみるとみることができないことは明らかであろう。古代国家の貴族にとつて、蝦夷は王化に浴すべき化外の蛮族として描き出す必要があつたのである。

つぎに同じ『日本書紀』でも、右の景行紀にくらべてはるかに実録的と思われる記事における蝦夷の記述をみてみよう。斉明天皇五年（六五九）七月に遣唐使が派遣されるが、それには蝦夷の男女二人が同乗して唐まで行き、唐の皇帝高宗にも謁見した。このときの遣唐使の使人と高宗とのやりとりをみてみよう。

高宗「蝦夷は幾種ぞ」

使人「たぐひ類、三種あり。遠き者は津加留つかろと名づけ、次は

かき麁蝦夷、近き者は熟蝦夷と名づく。今此は熟蝦夷なり。歳毎に本国の朝に入貢す」

高宗「その国に五穀ありや」

使人「なし。肉を食ひて存活わたらふ」

高宗「国に屋舎ありや」

使人「なし。深山みやまの中にして、樹本このもとに止住すまふ」

高宗「朕、蝦夷の身面の異なるを見て、極理めて喜び

怪しぶ」

これは、このとき遣唐使の随員として入唐した伊吉連博徳の手記である「伊吉連博徳書」からの引用である。したがつてその信憑性は、当然のことながら、通常の『日本書紀』の文章よりも高いはずである。ここでも使人は、蝦夷は農耕を行わず肉を食べて生活しており、住居もなく山奥の木のもとで暮らしていると、蝦夷の生活文化が倭人とは大きく異なるという返答をしている。実録性の高い「博徳書」であるから、使人の返答の内容自体は事実を伝えたものとみてよいであろう。問題はその返答が、事実を伝えたものとみることができるといふことである。

実は古代国家自身が、このような蝦夷観と明らかに矛盾することを述べている史料が厳存する。『続日本紀』延暦八年（七八九）七月丁巳条では、アテルイ率いる蝦夷軍に惨敗した持節征東大將軍紀古佐美が奏状で「胆沢は水陸万

頃にして、蝦夷えみしいまをがら存生へり」(胆沢には広大な水田・畠があり、蝦夷はそれによって生活している)と胆沢の蝦夷が農耕を行っていたことを語っているし、『類聚三代格』巻一九延暦六年(七八七)正月二十一日官符には「無知の百姓、憲章を畏れず、此の国家の貨を売り、彼の夷俘の物を買ふ。綿は既に賊に襖あう胃(綿入れの甲胃)を着せ、鉄は亦た敵に農器を造らしむ」と、百姓の利敵行為を糾弾する際に蝦夷が農具を自作していることを吐露している。このように蝦夷が農耕を行っていたことは、実は国家も貴族もすでに知っていたとみるべきなのである。

それなのに、遣唐使の使人が蝦夷は農耕を知らず、住居ももたない蛮族だと説明しているのは、高宗の下問に対して蝦夷には三種あり、そのうちの熟蝦夷は「歳毎に本国の朝に入貢す」と述べていることと関係しよう。倭国の東北の辺境には蝦夷という蛮族の国があつて、その国が毎年倭国の朝廷に朝貢してくるといふ説明をして、倭国が周辺の「蕃国」をしたがえた「東夷の小帝国」であることを唐に印象づけようとしたことがうかがわれるのである。そのような理由で、倭国の辺境には王化の対象となるべき「異俗の民」の存在が必要とされたのであり、蝦夷はことさらに蛮族でなければならなかったのである。

近年の考古学的な調査・研究の進展はまことにめざまし

く、「蝦夷」の生活文化の解明も長足の進歩をとげた。くわしくは後節で取り上げるが、東北地方の「蝦夷」とよばれた人びとの大半が、少なくとも七世紀以降は一般の倭人と同じカマド付きの竪穴住居に住み、稲作農耕も行ったことは、今日ではまったく疑問の余地がない。この事実をふまえない蝦夷論は、現在ではもはや学術的価値はないといつても過言ではなからう。

二 「蝦夷穴」の話——民間伝承のなかの蝦夷像——

古代国家において蝦夷は王化に浴すべき蛮族と位置づけられ、そのために農耕も知らず、住居ももたない「異俗の民」とされて、その実像がねじ曲げられてきたことをみた。中世以降、蝦夷はエゾとよばれ、蝦夷地とその周辺に居住地が限定されるようになるが、そのあともゆがめられた古代蝦夷像の残滓が民間伝承のなかに生き続けた可能性がある。それを示すのが「蝦夷穴」伝説である。

石川県七尾市の能登島須曾町には須曾蝦夷穴古墳という名称の古墳が所在する。筆者は、なぜ能登で「エゾ」なのに興味をもち、今春、富山・能登地方を訪れる機会があったので現地に足を運んでみた。この古墳は古墳時代終末期、七世紀半ばの小型の方墳で、安山岩の板石をアーチ状に積み上げた立派な造りの一対の横穴式石室(雄穴・雌穴

と通称)が南側に開口していた。石室の造りは、朝鮮半島の墳墓に通じる特色をそなえているとされ、現在、国史跡に指定されている。

このように、遺跡の形態からみれば、古代の蝦夷とまったく無関係なことは明らかなのであるが、なぜ「蝦夷穴」と名づけられたのかというと、『能登名跡志』(一八〇七年以前に成立)に「此村に蝦夷の岩屋とてあり、昔蝦夷の大男とて、異人の在し洞といへり」とあるので、開口した横穴式石室を洞穴に見立て、そこに「エゾ」の大男が住んでいたという伝承がもとになって名づけられたことが知られる。

実は、福島・宮城両県でも同じように「蝦夷穴」とよばれる古墳時代の横穴墓、あるいはまれに横穴式石室の古墳が数多くあり、遺跡名や字名になっていることも少なくない(次ページ表参照)。それらはいずれも横穴や石室が外部に開口しているという特徴がある。これらのうち、郡山横穴墓群については、『封内風土記』(一七七二年成立)巻七刈田郡郡山邑に「旧跡一。洞穴有_二五十二_一。土人呼_レ之曰_二蝦夷穴_一。伝云、上古蝦夷所_レ居」とあり、おもしろいことに須曾蝦夷穴古墳とまったく同じように、横穴を洞穴に見立て、そこに遠い昔にエゾが住んでいたという伝承がもととなって、蝦夷穴と通称されていたことがわかる。

「蝦夷穴」は、古墳時代の横穴墓や横穴式石室墳ばかりでなく、自然の洞窟にも名づけられることがあった。ただその場合、文献などに記録が残ることはまれであったと思われるから、そのような例はもともかなり多かつたとみて誤りないであろう。今回の短期間の調査では、関東地方から「蝦夷穴」を見つけ出すことはできなかったが、東北地方から遠く離れた石川県に二例現存することから考えると、江戸時代までさかのほれば、「蝦夷穴」とよばれた洞穴や横穴墓は東日本の広い地域に分布していた可能性が高いように思われる。

このように、「蝦夷穴」伝承のポイントは、自然の洞穴、ないし開口した横穴墓や横穴式石室などに、遠いむかしに異俗の民である「エゾ」が住んでいたという点にある。ここで「エゾ」が遠いむかしの穴居民とされていることに着目すると、江戸時代に蝦夷地に住んでいたエゾ、すなわちアイヌ人と関係づけてイメージされていたとは考えがたい。むしろ漠然とはあっても、古代の蝦夷がイメージされていたとみるほうが自然であろう。ただしその場合、横穴墓も横穴式石室墳も墳墓であるから、ここに「エゾ」が住んでいたとするのは、いうまでもなくまったくの誤解である。なぜ「エゾ」を穴居民とする伝承が生まれたのかは明確でないが、景行紀の「冬は穴に宿ね」という記述と無関係で

「蝦夷穴」一覧表

	名称	所在地	備考
	<遺跡名蝦夷穴>		
1	蝦夷穴洞穴	岩手県遠野市細越恵曾	洞窟遺跡
2	夷穴 ^{えぞあな} 横穴墓群	宮城県栗原市若柳字上畑岡夷穴	横穴墓
3	夷穴 ^{えぞあな} 横穴墓群	宮城県松島町幡谷字蝦夷穴	横穴墓
4	蝦夷穴古墳群	福島県大玉村大山字大仏	横穴墓
5	蝦夷穴横穴墓群	福島県郡山市田村町小川字下田	横穴墓
6	蝦夷穴古墳	福島県須賀川市和田字蝦夷穴	円墳（横穴式石室が開口）
7	蝦夷穴横穴墓群	福島県中島村松崎字善棚	横穴墓
8	須曾蝦夷穴古墳	石川県七尾市能登島須曾町	方墳（横穴式石室が開口）
	<通称蝦夷穴>		
			（ ）内は出典
9	大沢横穴墓群	宮城県栗原市築館	横穴墓（栗原郡志）
10	白地横穴墓群	宮城県登米市中田町	横穴墓（宮城県の地名）
11	大代横穴古墳群	宮城県多賀城市大代	横穴墓（多賀城市史）
12	元南田遺跡	宮城県川崎町支倉字元南田	洞窟遺跡（遺跡標柱）
13	郡山横穴墓群	宮城県白石市郡山字穴前	横穴墓（封内風土記）
14	日向 ^{ひなた} 洞窟遺跡	山形県高島町竹森姥ヶ作山	洞窟遺跡（日向洞窟遺跡西地区石器群の研究Ⅰ）
15	蝦夷穴	福島県西郷村字高野下	洞窟（西白河郡誌）
16	稲荷前横穴古墳群	福島県浅川町太田輪字稲荷前	横穴墓（西白河郡誌）
17	久保横穴墓群	福島県白河市大南田	横穴墓（西白河郡誌）
18	名古谷横穴墓群	福島県檜葉町山田岡字名古谷	横穴墓（福島県の地名）
19	大塚山古墳群	福島県会津若松市一箕町八幡大塚	横穴墓（福島県の地名）
	<地名蝦夷穴>		
20	蝦夷穴	福島県福島市蝦夷穴	洞窟あり（信夫山南麓）
21	蝦夷穴	福島県福島市渡利字蝦夷穴	
22	エゾ穴	福島県会津若松市河東町広田	旧広田村字エゾ穴
23	蝦夷穴	福島県磐梯町大字大谷字蝦夷穴	洞窟？
24	蝦夷穴	石川県輪島市杉平町蝦夷穴	

はないように思われる。古代国家の創り出したゆがんだ蝦夷像がしだいに民間にも浸透していき、その残滓が、横穴墓や横穴式石室が埋葬施設であることが忘れ去られたのちの時代に、新たに「蝦夷穴」伝説を生み出すものとなったのではなからうか。

横穴式石室も横穴墓も、考古学的にいえば古墳文化の墓制で、蝦夷特有のものではない。そのうね能登地方はもちろんのこと、現在の福島県の全域と宮城県南部（阿武隈川流域）は、のちに述べるように、古代蝦夷の居住域ではなかった。したがって「蝦夷穴」の大半（表に掲げた二四例中一八例）は、蝦夷の居住域外ということになるのである。このように「蝦夷穴」伝説は、何重にも誤解を重ねたものといつてよく、中世以降、民間にも偏見に満ちた蝦夷観が広く浸透していったことがうかがわれる。

三 蝦夷研究の歩み

古代蝦夷の研究者もまた、古代国家が意図的にゆがめた蝦夷像の呪縛から容易に抜け出すことができなかつた（本節については、工藤雅樹『古代蝦夷』（吉川弘文館、二〇〇〇年）によるところが大きい）。

古代蝦夷の研究は、蝦夷アイヌ説を自明のこととするところからはじまつたといつてよい。中世以降、蝦夷（エ

ゾ）といえは北海道のアイヌをさすので、ごく自然に古代の蝦夷も同じ人びとと考えたのであろう。新井白石の『蝦夷志』や本居宣長の『古事記伝』などにそのような立場からの記述が見受けられる。

明治になると、お備い外国人たちによって石器時代人アイヌ説がとねえられた。モース（大森貝塚の発見者）やシーボルト（江戸時代に長崎オランダ商館の医師であったシーボルトの息子）が有名である。ここでいう石器時代とは縄文時代のことであるが、彼らは貝塚などの遺跡・遺物の調査にもとづいて、石器時代人を日本人の祖先ではなく先住民とみなし、それをおおむねアイヌ人と考えた。

石器時代人アイヌ説では、鳥居龍蔵の見解などに典型的にみられるように、大陸から日本列島に渡ってきた弥生人こそが「原日本人」、すなわちわれわれ日本人の祖先で、かれらは各地で石器時代人Ⅱアイヌを伐ち破つて北へ北へと駆逐していったと考える。この説では、土器の違いを年代差ではなく人種・部族の違いを示すとみなし、先住民Ⅱ縄文人と大陸からやって来た原日本人Ⅱ弥生人とは水と油のごとく決して混じり合わずに衝突をくり返し、劣勢であった先住民がしだいに北方へ追いやられて北海道にだけ住むようになる、それがすなわちアイヌであると考えるのである。要するに、この説では縄文人も現代のアイヌも人種

的には同じとみる考え方が前提となつてゐるのである。またこのような見方に立つと、アイヌ人は縄文人の生き残りということになるから、両者の中間に存在した古代蝦夷も縄文人の後裔で、すなわちアイヌ人であると考えるのは自然の勢いであつた。古代史家の喜田貞吉はそのような立場から多くの論考を發表した。

石器時代人アイヌ説は大正期に入ると全盛期をむかへるが、やがて若手の人類学者から批判の聲があがるようになる。とくに清野謙次と長谷部言人は、膨大な人骨データの科学的な分析から石器時代人アイヌ説に実証的な批判を加え、しだいにその学説を過去のものとしていつた。両氏とも、石器時代人アイヌ説では先住民とされてきた石器時代人Ⅱ縄文人を日本人の祖先Ⅱ原日本人とみなし、その原日本人が形質的に変化して現在の日本人になつたと考え、その間に人種の入れ替わりを想定しないのである。

この新しい学説は、旧來の石器時代人アイヌ説とくらべると人種に対してきわめて対照的な考え方をしている。それは旧説が人種を千年、二千年にわたつてその形質的特徴が維持されるきわめて固定的なものと考えたのに対して、この新説は人種は何らかの外的要因によつて歴史的に変化するという立場をとることである。ただしその原因については、清野は朝鮮半島からの渡來人との混血を重視するの

に対して、長谷部は狩獵・採集社会から農耕社会へといった生活環境の変化によつて形質が歴史的に変化すると考えた。前者は「混血説」、後者は「変形説」、または「連続説」とよばれる。この両説は、戦後もそれぞれ金関丈夫と鈴木尚などに受け継がれ、論争がくり広げられた。近年では埴原和郎が「混血説」を批判的に継承し、日本列島内の地域差（「二重構造性」）の形成過程を重視する日本人形成論を提起している。

人類学の發展によつて人種を固定的にとらえることの誤りが明らかとなつたことは、古代蝦夷をアイヌ人に直結させる蝦夷アイヌ説に見直しをせまることになり、蝦夷辺民説の登場に道を開くことになつた。

戦後、青森県田舎館村の弥生時代の遺跡である垂柳遺跡で大量の焼米を発見し（のちに水田跡が発見される）、本州の最北端にまで稲作農耕が伝播していたことを確実にした考古学者の伊東信雄は、蝦夷も稲作を行つたのである。日本人と蝦夷の間には本質的な文化的差異はなく、ただ若干の遅速の差があつたために異族視されたに過ぎない、という辺民説を主張した。さらに高橋富雄が、津田左右吉・坂本太郎らの研究をふまえながら、蝦夷とは東方の「まつろわぬ人々」を指した政治的觀念であつて、蝦夷がアイヌであるかないかということには、本来關係が

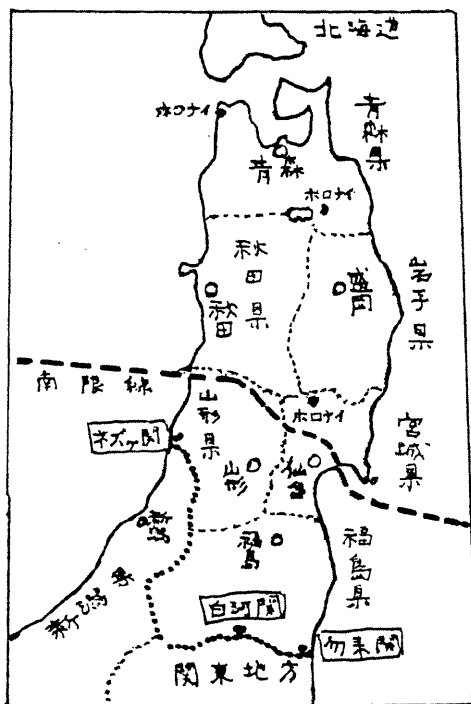


図1 アイヌ語地名の濃い地帯の南限線 (山田1993)

ないとして、文献史学の立場から辺民説を補強した。こうして考古学・文献史学の両分野から蝦夷アイヌ説への有力な批判が出されたことで、蝦夷は文化的・人種的には一般の日本人(倭人)と同じであるが、中央政府に服属していなかったために異族視された人びとであったとする辺民説(非アイヌ説)が通説としての地位を占めることになった。

四 蝦夷論の新しい動向

筆者の学生・院生時代(一九七〇年代)は辺民説の全盛

期であったが、そのころからアイヌ説再評価の動きが起こってくる。口火を切ったのはアイヌ語地名研究家の山田秀三である。山田は長年にわたって踏査をくり返しながら北海道・東北のアイヌ語地名の研究を行ってきたが、その結果、太平洋側では宮城県北の大崎平野あたり、日本海側では秋田・山形両県境あたりに「アイヌ語地名の濃い地帯の南限線」が引けることに気がついた(※図1)。

この山田の見出したアイヌ語地名地帯の南限線に対して、間もなく、別の角度からその存在を裏づけるような意見を出す考古学者が現われた。それは伊東信雄である。伊東は東北大学の最終講義で、岩手県の角塚古墳を除けば、古墳は宮城県北の「鳴瀬川、江合川の流域から〔山形県北の〕最上川流域を結ぶ線以南」にしかなく、「ここに古墳時代から一本の線がひかれる」とし、さらにこの線から北では北海道系の続縄文土器が出土することに注意をうながし、東北部で盛んに大古墳が造営されていた四〜六世紀に、東北北部では古墳が造営されず、北海道的な文化が南下してきていたという、現在では常識化している事実をはじめて指摘したのである。そして山田のアイヌ語地名の研究を引き合いに出し、「アイヌ語

地名の濃厚に分布する範囲は宮城山形両県の北部から北で、前述の北海道的な土器の分布範囲とほぼ一致する」ことを指摘する。それをふまえて「東北地方に北海道のアイヌと同じくアイヌ語を話す人間が居住していたことは否定出来る」¹、「蝦夷もある時代まではアイヌ語を使用していた」という考えをはじめて表明したのである。

蝦夷辺民説の旗手の一人と目されていた伊東が、晩年になつて蝦夷アイヌ説を唱えたことは、少なからぬ研究者から驚きの目をもつて迎えられた。この伊東の最終講義を聴いた工藤雅樹は深い感銘を受け、この後蝦夷アイヌ説と非アイヌ説（辺民説）の統合を目指すようになる。工藤は伊東の問題提起を受けて、「蝦夷アイヌ説は古代蝦夷の実体のうちの北海道的部分を強調しており、蝦夷辺民説では蝦夷の文化の日本的な面をとりだしている」のであつて、「二つの説を対立する説と見なくとも良い」として、両説は止揚、統合されるべきという方向性を提示した。この提言は今後の蝦夷論のあるべき方向を示したものとして高く評価されるべきであるが、では具体的にどのような形で両説を統合、止揚し、新たな蝦夷論を構築していったらよいのかということになると、いまだアイヌ説の再評価にとどまつていて、具体性に欠けるうらみがあることは否定できない。

このように蝦夷論研究の長い歴史においては、蝦夷とはアイヌなのか、それとも日本人と異ならない人びとであつたのかということが問われ続けてきた。したがつて蝦夷論には、「民族とは何か」という民族論が密接に関連している。ところが、人類学や社会学の分野では二〇世紀後半以降、民族のとらえ方が大きく変わつてきている。最近、藤沢敦はそのような近年の人類学・社会学の民族理論をふまえて、これまでの蝦夷論に全面的な批判を展開している。

近年の人類学・社会学などでは、民族、エスニック・グループは、他者である「彼ら」との相互関係のなかから醸成されてくる「我々」意識によつて状況に応じて形成され、変化していく集団とみる主観主義的民族論が主流になつていく。このような民族論は、それまでの民族論が民族を出自や文化・宗教・言語などの客観的指標によつて区別される固定的で永続的な実体としてとらえる客観主義（本質主義）的な民族論に対するアンチテーゼとして唱えられたものであるが、近年の民族紛争などを見ても妥当性の高い、優れた民族論であると思われる。

藤沢は民族論のそのような動向を主導したフレデリック・バルトの境界論に依拠して、「民族の問題を考える際には、文化的同一性の追求ではなく、どのように境界が形成されていくのかという観点から検討しなければならな

い」と論じ、「本質主義的（『客観主義的』）アプローチでは、倭人と蝦夷の差異を説明することは不可能」であるとして、これまでの蝦夷研究を根本的に批判している。筆者も、藤沢の提言には啓発されたところが少なくないが、民族の客観的指標からのアプローチをいっさい否定する藤沢の研究姿勢はあきらかに行きすぎと思われるし、その蝦夷論は蝦夷觀念成立期の境界論に偏しすぎていて、蝦夷の歴史の実態に踏み込んだ議論にとほしいきらいがある。

そもそも「我々」意識を考古資料から跡づけることは、事實上、不可能であるし、蝦夷自らが残した記録が皆無という状況では、文献史料から検証することも至難の業である。そこで民族とは「我々」という主観的指標によって他者との相互関係のなかで構築される「変数」なのだ、ということをも十分に認識しながら、次善の策として、「我々」という同類意識の形成と密接な関係を有する出自・文化・宗教・言語・形質的特徴（人種）などの客観的指標によって民族、エスニック・グループの問題にアプローチすることが、蝦夷の民族論的研究においてとるべき方法であると考ええる。

五 蝦夷論の時間的・空間的枠組み

蝦夷（エミシ）とは、いうまでもなく歴史的存在である。

いい換えれば、蝦夷は歴史上の特定の時代に、日本列島の限られた地域に居住していた人びとであった。これは議論の余地のない動かしがたい事実と思われるにもかかわらず、これまでの蝦夷論ではこの点を自覚的にふまえないまま議論が行われてきた。筆者は、これこそこれまでの蝦夷論の抱えてきた根本的な欠陥ではないかと考える。蝦夷論は、蝦夷が存在した時間と空間を明確にしたうえで議論されるべきなのである。

蝦夷論の時間的、空間的枠組みを考えるにあたってまず指摘しておくなければならないのは、蝦夷は「我々」意識で結びついた民族名として使われはじめたわけではないということである。今泉隆雄が大化改新期の史料から指摘したように、当時、国造の支配下にあったクニを分割して評制を施行していく際に、国造の支配領域の外側の住民を一括して「蝦夷」とよんでいることが知られる。すなわち「蝦夷」とは、本来、倭王権がその政治支配の外側の人びとに一括して貼ったラベルにすぎない。その点で、かつて高橋富雄が、蝦夷を「まつろわぬ人々」を指した政治的觀念であって、その民族の実態とは直接関わらないとしたことは、そのかぎりにおいてはまったく正当なのである。

「蝦夷」が自称ではなく、王権が支配領域の外側の化外の民をよんだ呼称に起源するとすれば、それは「蝦

夷」とよばれた人びとが歴史上の特定の時期と、列島内の特定の地域に限定される存在であることに論理的根拠を与えるものとなる。

まず蝦夷（エミシ）の消滅時期は、以前からエゾという言葉が和歌で使われはじめる一二世紀ごろとされてきたが、近年、熊田亮介が指摘した、応徳三年（一〇八六）正月の文書（『平安遺文』九卷四六五二号）にみえる「衣會別嶋の荒夷」の「衣會」がエゾであれば、一一世紀までさかのぼることになる。それに対して「蝦夷」観念の成立時期についてはほとんど議論されたことがなかったが、筆者は以下のような根拠から、六世紀半ばごろと推定した。

まず、『日本書紀』敏達天皇十年（五八一）閏二月条には、朝貢してきた蝦夷の族長綾糟が当時の王都である詔語田幸玉宮からほど近い泊瀬川はつせの流れに入り、三諸岳みつものせ（三輪山）に向かつて朝廷への忠誠を誓うようすを伝えた記事がある。これは蝦夷の服属儀礼のようすを具体的に伝える唯一の史料であり、一定の事実を反映しているとみてよい。とすれば、遅くとも六世紀後半には服属した蝦夷が王宮まで朝貢してきていたことになる。

つぎに、『宋書』倭国伝所載の昇明二年（四七八）の倭王武上表文には「東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐることに九十五

国」という有名な一節がある。周知のように「蝦夷」は「毛人」とも表記するので、ここにみえる「毛人」を「蝦夷」と同一の観念とみてよいかが問題となる。「蝦夷」に對置されるべきは「隼人」であるはずなのに、ここは「毛人」に対して「衆夷」となっている。しかも「夷」とは、中華世界の東方の夷狄をさすから、この「衆夷」とは倭王権の所在地ではなく、中国王朝を基準とした呼称であると理解される。すなわち倭の五王の時代には、「蝦夷」観念の成立に不可欠な倭国的華夷思想はまだ成立していなかったとみられる。上表文にみえる「毛人」は、おそらく『山海経』の「海外東経」に中国の東北方の国としてみえる「毛民国」などの影響を受けたもので、倭国の王都より東方の広い範囲の人びとを漠然と呼んだものであろう。

このように「蝦夷」観念は五世紀後半には未成立だったとみられるので、その成立時期は五世紀末～六世紀半ばごろにしばらくされる。「蝦夷」観念が国造制と密接に関わることに着目すると、一般に国造制の成立時期とされている六世紀半ばごろに、その施行領域の北側の住民を一括して「蝦夷」とよび、朝貢制的な支配下に置こうとする政策がはじまったと考えることができるのではないか、というのが私見である。そうすると、蝦夷論の時間的枠組みは、ほぼ六世紀～一二世紀ごろということになる。

つぎに蝦夷の空間的枠組み、すなわちその居住範囲であるが、倭王権が国造の支配領域外の人びとを「蝦夷」とよんだとすれば、まずは国造の置かれた範囲を考定する必要がある。やや問題のある史料であるが、『先代旧事本紀』所収の「国造本紀」には、太平洋側の北限の国造として「伊久国造」や「思国造」（「日理国造」の誤記説が有力）がみえる。いずれも現在の宮城県南部に比定される。日本海側では「久比岐国造」や「高志深江国造」があげられる。久比岐国造はのちの頸城郡（現新潟県西部）、高志深江国造は、平城宮跡で「越後国沼垂郡深江□□」という木簡が出土しているので、沼垂郡のあった現在の新潟市付近に比定される。

「国造本紀」だけでは不安が残るので、それを補強するために初期の城柵が設置された地域をみてみよう。大化改新の直後から、古代国家は国造の支配領域の外側の、まっろわぬ人びと（＝蝦夷）の住む政治的に、異質な世界に城柵を設置し、支配領域を拡大していく政策をとるようになる。したがって城柵が置かれたところは、もともと蝦夷の居住地であったところで、それも通常は、その時点での蝦夷の居住地の南限に近いところとみてよい。そこで改新後に造営された城柵をみていくと、日本海側の高志（越）国では、淳足・磐舟の両柵があり、太平洋側の道奥（陸奥）

国では、文献史料は残されていないが、初期の城柵遺跡である郡山遺跡（仙台市南部、のちの名取郡域）が該当する。そのほか『日本書紀』持統天皇三年（六八九）正月丙辰条には「陸奥国優嶂曇郡城養蝦夷」とあって、「城養（＝柵養）蝦夷」が米沢盆地の優嶂曇評（のちの置賜郡）にいたことが分かる。柵養蝦夷とは、帰服して城柵に付属し、城柵から食糧（夷禄）などを支給される蝦夷のことであるから、米沢盆地にも城柵が置かれていたとみてよい。

このように国造の北限と城柵の南限は、ちょうど表裏の関係にあることが知られる。また史料上「蝦夷」とよばれた人びとの分布をみても、城柵の南限ラインよりも北に限られる。以上のような考察によつて、蝦夷の居住範囲は新潟平野―米沢盆地―阿武隈川河口付近を結んだ線（図2の(a)ライン）より北側であったことが導き出される。

『日本書紀』斉明四年（六五八）四月条の阿倍比羅夫の北征記事を初見として古代史料にしばしば現われる「渡嶋蝦夷」の「渡嶋」は、かつては秋田・能代・津軽などの本州北部の総称とする説もあったが（津田左右吉など）、現在では北海道のこととみるのが学界の定説となっている。渡嶋蝦夷を服属させた阿倍比羅夫は、生きた熊二頭と熊の毛皮七〇枚を携えて凱旋するが、周知のように熊は本州以南には生息しないし、近年、古代を通して北海道と本州の

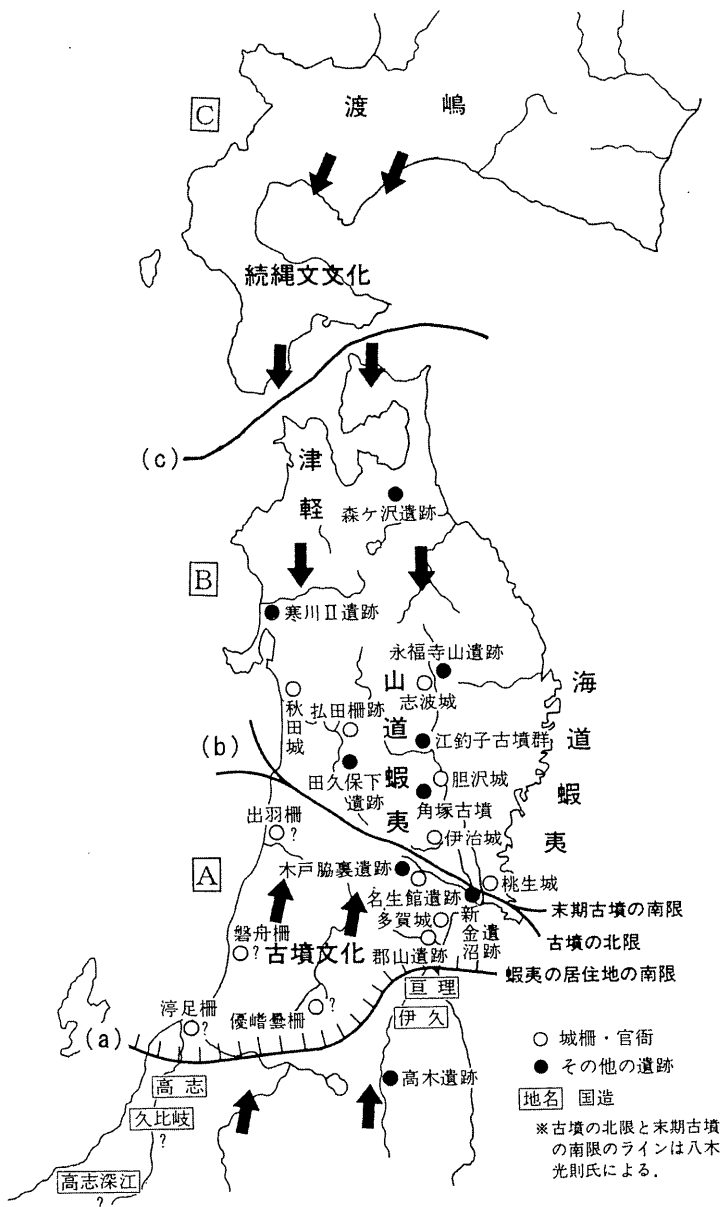


図2 蝦夷の居住域と地域区分 (熊谷2004b を改変)

間に密接な交流があったことが考古学的に解明されている。したがって、古代の北海道の住民（擦文人）も蝦夷とよばれていたことになる。

このように、蝦夷論の空間的枠組みは新潟平野と阿武隈川河口付近を結んだラインよりも北で、北海道も含むということになる。ただしこのうち南限ラインは、時期がくだるにしたがって北上していくことに注意しなければならぬ。新潟平野―米沢盆地―阿武隈川河口付近というラインは、あくまでも七世紀半ばごろの状況である。蝦夷は、律令国家の政策によってしだいに南の地域から同化されていき、八世紀の後半には、東北地方ではほぼ現在の青森・秋田・岩手の三県に宮城県の北部を加えた範囲（図2の(b)ライン以北）に限られるようになると思われる。

六 蝦夷の文化的多様性

蝦夷論の前提となるべき時間的・空間的枠組みを定めたので、つぎにいよいよ蝦夷の実像に迫っていきたいと思う。

前節で述べたように、「蝦夷」とは、本来的には倭王権がその政治支配の外側にいた「まつろわぬ人々」に一括して貼ったラベルにすぎない。蝦夷の実像に迫ることを課題とする本稿の立場からすると、このような蝦夷観念の本来的性格から、まず「蝦夷」とよばれた人びとが決して均質

の文化をもっていたわけではなかったということを確認することから出発したい。「蝦夷はアイヌか、それとも日本人か」という伝統的な問いでは、アイヌ・日本人が均質で超歴史的な存在とされているばかりでなく、蝦夷もまた均質な民族であることが自明のこととされていたことになるが、それ自身が現在の研究段階からすれば問題なのである。

「蝦夷」とよばれた人びとは、地域によって大きく異なる文化をもっていた。蝦夷の居住範囲の南限に近い地域（A）までは、古墳文化がほぼ本来の形態を保って伝播してきているので、一般の倭人との文化的な差異はほとんどなかったとみてよい。一方、東北北部の地域（B）は、奥州市の角塚古墳を除くと古墳はほぼ築造されず、かわりに続縄文系の土壙墓が造られ、さらに七世紀以降は末期古墳とよばれる小型の円墳が営まれるなど、独自の墓制を保持した地域である。ただしもう一方で、土師器・須恵器やカマド付き竪穴住居など、古墳文化の多くの文化要素はこのラインを大きく越えて東北北部に広く浸透していった。

また渡嶋蝦夷の居住地であった北海道（C）では、蝦夷観念が成立する六世紀は続縄文文化後期の北大式土器の時期に相当する。この時期は、竪穴住居が作られなくなる特異な時期である。平地住居、あるいは移動生活に適したテント状の簡易住居だったのではないかと考えられている。

七世紀に入ると、一万年ほど前からつづいてきた縄文が土師器の影響を受けて消滅し、ヘラ書きの沈線のみが残るの
で、これを擦文土器とよび、擦文時代に区分するのが一般的
である。擦文時代（七世紀―一二世紀）の北海道は、さ
まざまな形で本州方面の文化的影響を受けた。カマド付き
の竪穴住居や土器における縄文の消滅、多様な鉄器の流入
などはその顕著な例である。とはいえ文化全体としては、
自然環境の違いなどから独自性をつよく保持しつづけたこ
とも事実である。農業では、水稲農耕は伝播せず、アワ・
キビ・ムギなどの穀物栽培が主体であった。生業全体では、
当然のことながら、狩猟・採集・漁撈のウエイトが大きか
ったと考えられる。要するにCエリアの蝦夷は、考古学的
にいえば擦文人であることは明らかであるから、蝦夷の一
定部分が異文化集団であることは否定しがたいのである。

七 蝦夷の生業と文化 ― 東北北部の蝦夷を中心に ―

以上に概観したように、「蝦夷」とよばれた人びとの文
化は一樣でなかったが、最後に南北両系統の文化を融合さ
せた独自の文化を築きあげ、なおかつ律令国家にもつとも
頑強に抵抗したという点で、典型的な蝦夷ともいえる東
北北部（B）の蝦夷をとりあげ、その文化の全体像の復元
を試みてみたい。

蝦夷の文化の全体像を復元するためには、考古学と文献
史学の学際的研究が不可欠である。文献史学も考古学も、
研究資料の性質と研究方法に規定された限界があるからで
ある。具体的にいうと、考古学は、発掘調査によって地中
から出土した遺跡や遺物によって過去の歴史を研究する学
問なので、文献史料の有無にかかわらず人類の歴史を研究
できるという強みがある。ところがもう一方で、遺跡・遺
物という形で地中に残らないものは認識できないという大
きな限界がある。たとえば衣服のような繊維製品は通常は
地中に残らないし、考古資料から言語、思想や制度などの
具体的内容を直接知ることも不可能である。また戦闘のよ
うな一過性のものも、認識はむずかしい。

一方、文献史学では、蝦夷自らが書き残した記録は皆無
といつてよいから、蝦夷についての史料は他者である国家
の手になるもののみしか残されていない。したがってそこ
では、本稿の冒頭でみたように蝦夷の異俗性をことさらに
強調したり、誇張や造作が含まれることも少なくないし、
蝦夷の日常生活に関する記述もほとんど見られない。しか
しながらもう一方で、たび重なる蝦夷の反乱や服属した蝦
夷に対する叙位など、否定しがたい事実も数多く記録され
ているのである。

考古学者からは、文献史料は信用できないという本音

(?)を耳にすることもある。しかしながらこれは考古学の門外漢が、土の中に残ったものだけから歴史が分かるのだろうかという疑念を抱くようなものではないかと思う。考古学も文献史学も、自己の学問でしか明らかにできないことと、自己の学問では決して認識できないことがあるのである。このことを自覚し、相手の研究成果に学ぼうとする姿勢がなければ、決して蝦夷の実像にせまることはできないであろう。

蝦夷の生活文化に関しては、遺跡・遺物の学である考古学の得意分野であり、これまで多くの事実を明らかにしてきた。東北北部は、蝦夷觀念の成立期にあたる六世紀までは、続縄文文化圏に包摂され、奥州市中半入遺跡や八戸市田向冷水遺跡など、少数の古墳文化系統の集落遺跡を除くと竪穴住居はみられず、続縄文系の土壙墓の遺跡がみられるだけであった。この地域の人びとの多くは、同時期の北海道と同じく、遺跡として検出されにくい住居に住んでいたのである。ところがつぎの七世紀になると、南から古墳文化のカマド付き竪穴住居が太平洋側を中心に急速に広がってくる。それと同時に土師器・須恵器・稲作・馬飼など、土師器文化の他の文化要素も大幅に流入してくる。また最新の考古学的な研究によって、八〇一〇世紀には東北北部の広い地域で稲作や畑作が行われていた物的証拠

(水田跡や穀物の炭化した種子)が見つかっている。したがって七世紀以降の蝦夷の物質文化は、同時代の倭人とそれほど大きな違いはないとみななければならないのである。このようなことから、蝦夷は文化的には一般の倭人と大差ないと考える考古学者が少なくない。

しかしながら物質文化が類似していても、信仰や言語なども含む文化全般まで近似しているとは限らないであろう。考古学的にみても、東北北部の蝦夷の墓制が、続縄文系の土壙墓から末期古墳へと、古墳文化の影響を受けつつも独自の墓制を数百年にわたって維持するのは、軽視できない事実である。これは墓制やその背後にある死生観が倭人とは異なっていたことを示すものであり、宗教も倭人とは異なるものであった可能性を示唆するものではないかと思われる。

蝦夷と倭人の文化的差異を考えようとすると、さらに重要になってくるのは言語である。考古資料から蝦夷の言語を認識することは、その言語を記した文字資料でも見つからないかぎり不可能であろうが、文献史料によれば蝦夷の言語は「夷語」とよばれ、胆沢鎮守府には訳語(通訳)が置かれていたことが知られる。律令制下に訳語あるいは通事^{おき}が置かれていたのは、漢語・新羅語・渤海語・夷語、それに南嶋(奄美大島等)だけであって方言レベルで置かれ

た例はない。すなわち、文献史料からみるかぎり、蝦夷と倭人の言語の相違は方言レベルを越えていると考えざるをえないのである。

もともと近年の言語学者の見解によれば、方言か別個の言語かの主要な基準は、お互いにことばが通じる、同じなという問題よりは、民族の問題とかわる。「我々」意識の醸成に結びついているか否かということがカギになるという。すなわち「我々のことば」と認識するか、それとも「他者のことば」と認識するかということである。この点からいっても、蝦夷のことばは「夷語」、すなわち化外の民の言語と認識されているのであるから、蝦夷を倭人と区別する指標の一つと考えられていたことが明らかである。蝦夷の文化を考える場合、この問題はきわめて重要である。律令国家は、言語の違いを一つの指標として蝦夷を倭人と異なる他者として認識していたのである。

文献史料からは、蝦夷の言語が具体的にどのような系統のものであったのかというところまでは分らないが、その空白を埋めてくれるのがさきに取り上げたアイヌ語地名の研究である。金田一京助や山田秀三は、東北北部にはいわゆるアイヌ語地名が多数存在することを指摘している。アイヌ語地名は地形にもとづいて付けられることが多いためにいくつかに類型化することが可能であるし、遠く離れ

た場所でも似たような地形の所には同種の地名が付けられるという特徴がある。山田が指摘したアイヌ語地名が濃密に分布する南限が古墳の北限ラインとされる図2の(b)にほぼ一致することはきわめて重要である。(b)のラインは、古墳時代前期の四世紀から平安初期の九世紀までの五〇〇年以上にわたって南北両文化の境界であり続けた、古代の東北地方で特別な意味をもつ境界ラインだからである。これにさらにB地域では、律令制下に蝦夷の訳語が置かれていたという事実を重ね合わせれば、B地域の蝦夷がアイヌ語系統の言語を話していたというのは、もはやただの推測とはいえないであろう。

要するに、B地域の蝦夷は、言語や墓制など北方系の文化を基層にしつつ、稲作や土器・カマド付き竪穴住居など、主として考古学的に認識できる物質文化は、南の倭人のものを積極的に取り入れながら独自の文化を作り上げつつあった人びとという方向でみていくことで蝦夷の実像に迫っていくことができるのではないかと考えている。とはいえ、信仰や服装など、文献史料からも、考古資料からも実態を明らかにできない事柄がなお残されており、全体像の解明は将来に期せざるを得ない。

主要参考文献

- 石崎高臣 「陸奥北部の生業と交流」『アジア遊学』一三九、二〇一一年
- 今泉隆雄 「律令国家と蝦夷」『宮城県の歴史』山川出版社、一九九九年
- 工藤雅樹 「古代蝦夷」吉川弘文館、二〇〇〇年
- 熊谷公男 「蝦夷の地と古代国家」(日本史リブレット) 山川出版社、二〇〇四年^a
- 熊谷公男 「古代の蝦夷と城柵」(歴史文化ライブラリー) 吉川弘文館、二〇〇四年^b
- 熊谷公男 「古代蝦夷論の再構築に向けて」『東北学院大学論集 歴史と文化』五〇、二〇一三年
- 熊谷公男 「古代国家北縁の二つの境界―栗原市入の沢遺跡の発見によせて―」『日中韓周縁域の宗教文化』Ⅱ、二〇一六年
- 鈴木拓也 「蝦夷と東北戦争」(戦争の日本史3) 吉川弘文館、二〇〇八年
- 高橋富雄 「蝦夷」(日本歴史叢書) 吉川弘文館、一九六三年
- 埴原和郎 「日本人の成り立ち」人文書院、一九九五年
- 藤沢 敦 「倭と蝦夷と律令国家―考古学的文化の変移と国家・民族の境界―」『史林』九〇―一、二〇〇七年
- 八木光則 「古代蝦夷社会の成立」(ものが語る歴史) 同成社、二〇一〇年
- 山田秀三 「東北アイヌ語地名の研究」草風館、一九九三年

〔付記〕

本稿は、二〇一六年五月一日(土)に福島市コラッセふくしまにて開催された上代文学会大会公開講演会で「古代蝦夷の居住域と文化―蝦夷(エミシ)の実像に迫る―」と題して行った講演の内容をもとに、構成を新たに書き下ろしたものである。